

月まるごと野球

東都準硬式育てる

地元チームと記念撮影する東都選抜チームのメンバー（写真提供・東都大学準硬式野球連盟）



インドネシア野球の芽

18年まで発展手助け

初訪問で親善試合&野球教室
東都大学準硬式野球連盟の選抜チームが11月22日から7日間、インドネシアへ遠征した。同連盟が野球の発展途上にある同国を訪れたのは初めてで、親善試合以外に野球教室を開催するなど普及にも取り組んだ。選抜チームの杉山智広監督(33)、上野太一主将(中大4年)らに遠征の目的、成果について聞いた。

準硬式野球 アラカルト
目には軟式球も、中は硬式球という身は硬式球というイメージ。コルクの粉末と樹脂を混ぜ合わせてできた芯に糸を巻き付け、表面を天然ゴムで覆っている。直径71・5〜72・5ミリ、重さ141・2〜144グラム。戦後、硬式球の使用感に似ていながら軟式球のように手軽なボールを、と開発された。バットは硬式の金属製を使用する選手がほとんど。
プレーする場 大学生を中心に一部社会人など。2015年度の全日本大学準硬式野球連盟加盟校は281校

インドネシアの選手を丁寧に指導する東都選抜の選手たち



で、登録部員数は1万356人。1949年の連盟発足以来、初めて1万人を超えるなど競技人口は増えている。東都大学準硬式野球連盟は48年に発足。現在は35校が加盟し、1部から6部までに分かれて春、秋のリーグ戦を戦って優勝を争い、各都府県リーグ戦終了後に入れ替え戦を行う。
◆プロ入りした選手 ドラフト制後準硬式野球から直接プロ入りした選手は育成も含め9人。先のドラフトでは帝京大・鶴田のほかに関学大の坂本工宣(4年)「関西学院」が巨人から育成4位で指名された。

東都大学準硬式野球連盟 インドネシア遠征選抜チーム

選手名	所属	出身校	身長・体重	投打
和田大樹	中大	宮崎日大	179・75	右右
井手野木	中大	大倉	180・67	右右
藤田圭	中大	立教	178・78	右右
小菅	中大	立教	176・67	右右
中村	中大	日大	180・86	右右
渡邊	中大	日大	176・75	右右
中山	中大	日大	172・82	右右
佐藤	中大	日大	177・74	右右
原田	中大	日大	181・81	右右
加藤	中大	日大	180・75	右右
鈴木	中大	日大	168・60	右左
大塚	中大	日大	171・60	右右
鈴木	中大	日大	175・67	右右
鈴木	中大	日大	168・66	右右
鈴木	中大	日大	175・74	右右
鈴木	中大	日大	175・77	右右
間瀬	中大	日大	178・73	右右
金	中大	日大	178・78	右右
高	中大	日大	173・70	右右
高	中大	日大	170・70	右右
高	中大	日大	175・80	右右
高	中大	日大	174・85	右右

円内数字は監督、コーチが年齢。大学生は学年。



◆インドネシアの野球 野中監督によると、1960年代にキューバ大使館から伝道されたのが始まりとのこと。現在の競技人口は約5000人といわれ、全34州中24州でプレーされて

01年甲子園V主将 杉山智広監督率いる選抜
大先輩からの一言が赤道直下の島国に渡るきっかけとなった。3年前の某日、今回の遠征で代表を率いた杉山は、日大三高野球部で22歳年上の野中寿人(55)から相談を受けた。「インドネシアで野球を見てもらえないか」
野中は日大で選手生活を終え、2001年にバリ島へ移住。数年後から事業を営みながら子供たちに野球を教え始めて、現在はインドネシア代表チームの監督として同国のレベルアップに情熱を注ぐ。2001年、同校が夏の甲子園で初優勝した時の主将だった杉山は、日大に進むと準硬式でプレー。今は大学コーチ、連盟理事として準硬式野球の普及に力を入れる。
同国の野球事情を聞いた杉山は思いを巡らせた。「準硬式野球が何かのためになるはず。自費で3度、渡航して現地を視察。雨の多いインドネシアのグラウンドは水はけが悪く、硬式球はすぐ使えなくなる。準硬式球は表面がゴムで重さは硬式球とほぼ同じ。耐久性もある。この国の野球に向いている。連盟の承認を得て遠征を実現させた。

モドラ6 鶴田や甲子園経験者4人参加
遠征メンバー23人の中には金子翔馬ら甲子園経験者も4人おり、この秋のドラフトで楽天から6位指名を受けた鶴田圭祐も参加した。地元5つのクラブチームと対戦したが、いずれも10点差以上の差をつけての大勝。主将の上野太一は「レベルは日本の中学3年生くらいといった感じでしたが、足も速いし肩も強い。身体能力は高いです」と振り返る。
実力差歴然も貪欲 初心思い返した
実力差は歴然としていたが、試合後の野球教室では現地の選手の野球に対する貪欲さに感心した。投、打、守、走の全てを身ぶり手ぶりで指導。言葉は通じなくても熱意は伝わった。上野が「何でも貪欲に聞いてくれました。ありがたい探求心は見習わないといけないと思いました」と言えは、金子も「見ればとか関係なくやれることをやろうという姿勢が伝わってきて、初心というものを考えさせられました」とうなずいた。序盤は続出していた守りのミスも、終盤はほとんど見られなくなった。「生きた見本でした」と野中も手応えをつかんでいた。
メンバーは帰国後もLINEなどSNSを使って現地の選手と技術交流を続け、帰国時には硬式球30球、準硬式球10球、バット30本など用具も贈った。自費で参加した学生も国際貢献できたことに充足感を覚えている。インドネシア遠征は18年まで続く予定。「ボールの硬軟ではなく、野球を広めていきたい」。杉山の視線は世界に向けられている。(敬称略)